

## 夏秋感嘯歌篇

島田修三

風過ぐる畳の上にぞせし昼寝ひるいあはれ虚空そら飛ぶ夢さえ見なくに

夢に立ちアーヤラットはわが耳朶の左をつまみおごそかなりき

尾張住まひ十有五年を聞きしなし朝ひぐらしも夕ひぐらしも

だらしなき糸引き納豆と思へれどわが朝あさな朝あさないらだちては啖くふ

非定型精神病なるヤツカイは今日ほがらかに俺を呼び止む

濁流をなして過ぎゆく夏にして金井君とも無沙汰になりたる

ロアヨーテ諸島に遊びし夏とかやはかなき貝らてんの螺鈿らてんを置き去る

醬ひしほ酢すを夏菜かに合あててわが煮かでしトムヤンクンの眞実まことまづい

手拭てのこひを貸してくんなどいふ声のラヂオに響き左折せむとす

カナダなる蟋蟀むやみに巨おほきこと稿になづめばしきりに思ほゆ

あかつきを灯ともし見てをる檻樓図版ホルツマーデン動物群の

ビスキユイを喰ひたしなどとお洒落かな俺にすり寄り是れの風太郎ふうたろう

「ブルースを唄はう」しきりにしろがねの雨ふりしきる青山二丁目

かつて此処に古書肆のありて此の舗みせの嫁ひたぶるに意地わろかりき

神保町に内藤明とまた飲むはかたみに義理を果たしてぞのち

たれもかれも傷つきやすき国にして俺はも酔ひて内気をいたぶる

へモフィリア病む歳月をしづかにも休へて生き来し君をしぞ尊ぶ

蒸し浅蜷バターにひたし食ふぶるはポストン大学ハル君に倣ならふ

いへごもり俺は居りつつひだり足膝蓋うづくをなだめむとす

41 あかつきに見し夢ならむ内務省の暝くらき歩廊をわが行き暮れつ